季刊

直江の津

◉直江津経済文化研究会◉

冬号
2002-3
12,1,2月

◉特集1◉
人びとの心を継ぐ天と地の恵み◉桑取谷
西横山 小正月行事

◉特集2◉
直江津・五智十二景

巻頭エッセイ◉わたしの直江津
直江津恐怖体験

知の楽しみ
健康老化は人類の夢？

フリースペース
直江津の音楽文化◉その1
中井ソノ先生の思い出

ミニ特集
この秋 直江津のまちでやったこと

発刊のことば

直江津は、越後発祥の地という歴史を振り返るまでもなく、日本各地から山海の物産が集まり、四方に送り出す商いの場でした。そこに行き交う人びとが織りなす人間模様は、地域に文化を育て、数々の物語も生んできました。

これは、経済の拠って立つ場が文化を育む地でもあり、それらは別個のものではなく、根を同じくする一本の樹であることを実感させてくれるものです。

本誌は、経済であれ文化であれ、今からその種を播き、苗を育てようとする人たちのために、直江津を掘り起こし、耕しておこうというものです。そして、後々もう一度地域を見直そうというとき、その原点になるような深く地域に根ざしたものでありたいと考えています。

本誌に敢えて限定された地域名を付したのは、それが排他的なものでないことは言うまでもありませんが、社会が指標を失って混迷する今日、自らが立つ、足元の「地べた」を検証し直すことによってのみ、経済、文化、環境などあらゆるものへの問題提起、提言、行動が可能になると考えたからです。

本誌が広く共感を得て、上越後（かみえちご）全体の地域振興に寄与できることを念願する次第です。

平成十三年三月

直江の津

第八号　冬号
二〇〇二・〇三―十二・一・二

特　集1　人びとの心を継ぐ天と地の恵み桑取谷
西横山小正月行事　4
特　集2　直江津・五智十二景　10
巻頭エッセイ　直江津恐怖体験　藤田英明　3
知の楽しみ　健康老化は人類の夢？　鍋島陽一　16
フリースペース　直江津の音楽文化―その1
中井ソノ先生の思い出　箕輪　響　14
ミニ特集　この秋直江津のまちでやったこと　21
シリーズ　屋台まち　25
読書びと　清陰星雨　中井久夫著　20
見る目　文安三年銘府中八幡宮　鰐口　28
埋文センター・浄興寺本堂　13
東西海陸　24
読者から・バックナンバー　31

表紙筆文字は町名改正の願いの筆跡（明治十一年「福永家文書」）より。
「直江の津」とは中世の物語に登場する直江津のことである。



雪国の親子・真行寺参道入口

直江津恐怖体験

藤田英明

あれは今から八年前のやけに蒸し暑い七月のはじめころだったと記憶している。

僕が司会をしている地元のケーブルテレビの企画で夏らしく上越の恐怖スポットを取り上げようということになった。ある女性スタッフが「火葬場の近くにある五智の公園に血の涙を流すマリア像があるって噂知ってますか?」なんていきなり切り出した。

仕事柄、上越のさまざまな噂話は知っていたが、この五智の公園のマリア像の話は初めてである。血の涙とは本当なのか? それともただのいたずらか? その真偽を確かめるべく、カメラマン、照明兼女性ディレクター、そしてリポーターの僕という総勢三名で五智へと向かったのである。到着したのは夜の十時。街灯もない真っ暗な公園の中、ヘッドライトを頼りに探すこと十五分、植え込みの中に白い物体を発見!

「おい、あれじゃねえのか!」カメラマンの岩さんが慌ててブレーキを踏む。三人で車を降りて恐る恐る見てみると、それは間違いなく人間と等身大のマリア像であった。白いはずの地肌は潮風ですっかり黄ばんでしまってはいるが品のある美しい顔立ちである。

「ねえ、どこにも血の痕なんかないよ?」恐れを知らない良子ディレクターが照明をやけどするほど近づけて呟いた。「ほら、これただの汚れでしょう?」そう言うと、自分の爪でごしごしと顔をこすり始めたではないか。なんという罰当たり。僕は思わず「おい、止めろ、傷ついたらどうするんだ!」すると良子ちゃんはむっとして「何むきになってんの、バカみたい。岩ちゃんとりあえず遠くからこの場所撮影しよう。」そう言うが早いか車に乗りこむと走り去っていく。僕は真っ暗な闇の中一人取り残されてしまった。座ってじっと待つ。やけに蒸し暑い。しかし背中がぞくぞくして仕方ない。誰かにじっと見つめられているような感じが。思わず振り返ると……、そこにはあいも変わらずマリア像が立っているだけであった。血の涙なんて流してなんかいない。黒い瞳でじっと直江津の空を見つめているだけである。怖いほど黒々とした瞳で。

さて話はこれで終わりである。どこが恐怖体験なんだとお怒りのあなた、是非、その五智のマリア像を見ていただきたい。そうすれば僕の恐怖がきっとわかるはずだ、きっとね。

(上越市出身・落語家)

特集

人びとの心を継ぐ 天と地の恵み桑取谷 西横山 小正月行事

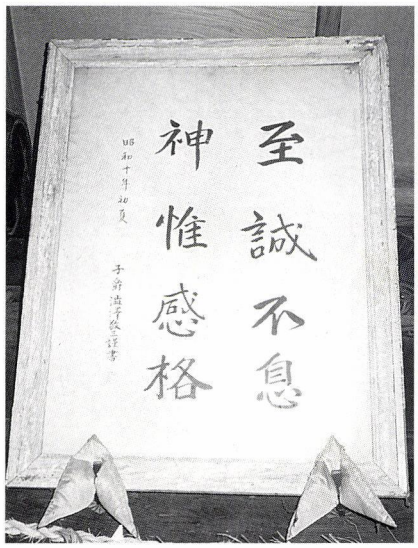


新しい年を迎えた桑取谷

「この越後の谷間のたった二十五軒の寒村に、この雄壮な生活の古典を見る時、そこに長い歴史を経過してきた精神生活の深さ、豊かさをみることができる。

米を穫ること、それは単に肉体労働によるエネルギーの交換ではない。この狭く痩せ細った貧しい日本列島を、黄金の国土に築きあげた農民の心には、神との深い交流が必要だったのだ。日本の農耕儀礼が、年間を通じて数繁くとり行われる姿は、とりもなおさず、日本農業の容易ならぬ苦難の跡を物語るものであろう。」

（濱谷浩『雪国』より）





左　澁澤敬三書（西横山白山神社）
右　モノづくり

雪国

上越市の西方、桑取谷西横山に昔ながらの小正月行事が大切に受け継がれている。

桑取谷は、民俗の宝庫といわれている。高田在住の民俗学者市川信次が、昭和七年、はじめて桑取谷を訪れ、その暮らしぶりを学界に紹介するや、日本民俗学の創始者の一人でもある澁澤敬三[*1]をはじめ、斯界の注目されるところとなった。なかでも、天の写真家[*2]、濱谷浩[*3]は、昭和十五年にはじめて西横山の小正月行事に出会い、ここで終生のテーマを発見することになる。以来、十年にわたって濱谷はレンズを通して小正月を撮らえ続けたが、これは写真集『雪国』に結実し、戦後写真史に衝撃を与えた。

小正月

西横山の小正月行事は、一月十一日の若木迎えに始まり、十四日から十五日にかけてマイダマ・モノづくり・鳥追い・嫁祝いなどを行って十五日のサイの神のオーマラで最高潮に達する。そして十八日の夜にガヤをはずして一連の行事が終了する[*4]。農耕儀礼として成立したと考えられているが、いつごろから行われていたかは、定かではない。

■若木迎え

十一日の朝、その年の当番が山に入り、サイの神のシン木、マイダマを飾るアカメの木（ミズクサ）、モノ（太刀や串）に使うヌルデなどを迎えて（伐って）くる。木を神聖なものと崇め、村人はこう表現する。迎えてきた若木は、各戸のものは、家の入口辺りの雪に、シン木は、サイの神の祭場となるサイの神田の雪上につき立てる。十一日はハツヤマといい、この日までだれも入山はできない。谷には、今でいうルールなどという範疇を超えた「掟」のような規範が残っているのだろう。それは、自然と共存するため営々と蓄積した人間の知恵に他ならない。

■マイダマ

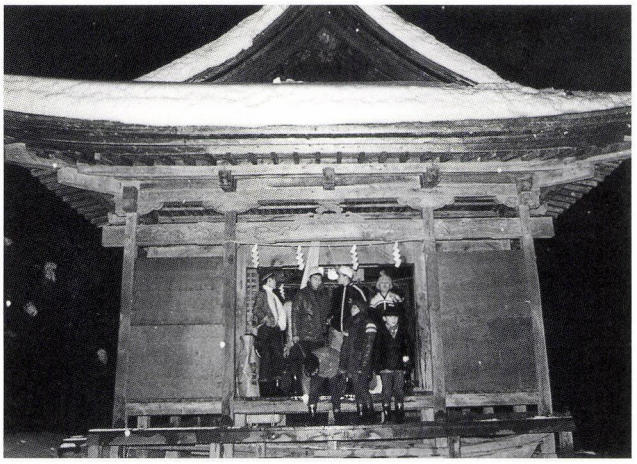
十四日の朝、餅をつく。つきたての餅を適当な大きさにまとめ、アカメの木につける。茶の間や神棚などの脇に飾ると、俄然、小正月らしい華やいだ雰囲気に包まれる。餅は昔から十六個つけるのが習わしだという。なぜ十六個つけるのか、村人でさえもわからない。

■鳥追い

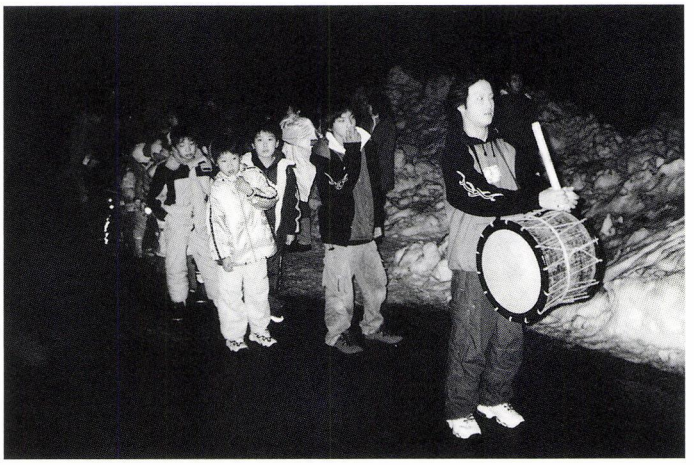
十四日の夜、子どもが主役となって鳥追いが行われる。田畑を荒らす害鳥を、佐渡島まで追い払う、というのである。村のほぼ中央にある白山神社に集まった子どもたちは、一列縦隊で桑取川に架かる橋に向かう。締太鼓を抱えた年長者が先導する。太鼓の調子に合わせて、

コーリヤどおこの鳥追いだ
ダイロウドンの鳥追いだ
シロウ（尻）切ってカシラ切って
コンダワラ（小俵）へほうらいこんで
佐渡島へホーホ　こうもりも鳥のニンジョ
（仲間）でホーホ

と、大声で何度も唱えながらゆっくり進む。



鳥追いに向う子どもたち



鳥追いの行列

歩みが速いと、やぶの中に潜んでいる鳥を追い出せないからだという。橋の真ん中に到着し、下流に向かって最後に一きわ大声で唱える。太鼓を「ドンドンドン」と打ち鳴らし、全員が「ウオーッ」と声を張り上げると、一回の鳥追いが終わる。帰りは追い払った鳥が戻ってこないように、音をたてずに静かに神社へ帰る。夜がふけるまで何度も繰り返し行われ、子どもたちの元気な声が桑取谷深く響き渡る（昔は明け方まで徹夜で行われた）。もともと男の子だけの行事だが、近年は、女の子や集落を出た親類の子どもも参加する。

■焼き草集め

十五日昼、子どもたちが、サイの神の原料となる焼き草（ワラや豆殻など）を集める。焼き草の束に、ヌルデの木でできた太刀を突き刺して、祝儀とともに各戸から集める。家家の玄関では、

サイの神　ワクワク
ゼンもカネも十万ガラリン
結構の十五日で　おめでとう

とあいさつしてまわる。祝日法の改正によって、成人の日（いうまでもなく、本来は小正月）が移動しても、西横山の人々が十五日にこだわる理由は、この歌詞に象徴される。十五日（小正月）でなければ意味がないのである。村（集落）では、小学校等へ働きかけ、今年（平成一四）も十五日に行っている。

■嫁祝い

嫁祝いは焼き草集めの途中、前年にお嫁さんを迎えた家の前で行われる。子どもたちがお嫁さんの頭上で太刀をたたき合わせながら、

男まけ　子まけ　大の男　十三人
祝いましょう　一つ　おまけに
祝いましょう

と、歌い、健康と子宝に恵まれることを祈願する。嫁祝いをしてもらう家では、お嫁さんが髪・衣服をととのえ、子どもたちへの祝儀や御神酒を用意して出迎える。

■サイの神のオーマラ

十五日の夜、八時頃になると村中に「オーマラ　ヤア、オーマラ」と叫び声が飛び交う。サイの神が始まる合図である。サイの神に参加できるのは大人の男子のみだが、忌みのかかっている人は参加できない。男たちはサイの神田に集まり、三本のシン木に焼き草を巻き付けて起こし、一本に合わせる。息が合わないと、なかなか起きない。作業を見守る長老から檄がとぶ。

オーマラが立ち上がると、男たちは、オガラで拵えたタイマツに火をつけ、振り回しながら、勢いよく叩き合う。前年にお嫁さんをもらった男性や厄年の男性は、打ち返すことは許されず、ただ打たれるのみである。男たちの熱気と、それを見守る村人のそれとがひとつになった頃、誰ともなくオーマラにタイマツを投げ入れ、火をつける。火の粉を散らしながら赤赤と燃えるタイマツと、漆黒の夜空を焦がすかのように燃え上がる炎は、真っ白な雪に映え、周囲を幻想的な世界へと誘う。

オーマラの火が燃え細ると、村の人々は近づいてきて、餅やスルメをあぶる。その餅を食べれば、無病息災に一年を暮らせるという。



サイの神の祠



白山神社で暖をとる

オーマラの余燼に、その年の五穀豊穣や子孫繁栄などの祈りを捧げつつ、行事のクライマックスは静かに幕を引く。

西横山の小正月行事は、有機的に結びついている一連の行事の一つひとつが、大人にせよ、子どもにせよ、それぞれの役割をきちんと担っている。そして、全てが村という、いわば共同体の中だけで完結するのである。鳥追いなど、子ども主役の行事においても、年長者を中心にまとまり、子ども独自の社会が構築されている。いいかえれば、家族や地域のつながりがあってこそ、小正月行事が伝承されるのである。

しかし、そんな西横山にも、一時期、子どもの減少から行事の伝承が危ぶまれたことがあった。もともと男子の行事である鳥追いに、女子や幼児、村からでた親類の子どもを参加させるなど、存続のための知恵をだしあった。大人が鳥追いに加わり、声を張り上げたこともあった。それは、何とか鳥追いの歌を絶やしたくない、という一心からであった。

そのころ、村では小正月行事保存会を発足させた。市の無形文化財指定[*5]という追い風も受け、村が一丸となって保存に乗り出した。小正月行事を中心に村がまとまったのである。

「文化財を地域の核として、むらおこしに活かす」、地方の時代といわれて久しい。どの地域でも、自分たちのアイデンティティーを模索している。口で言うのは簡単だが、とりわけ過疎化に悩む農村では、実際にやろうとしても、むずかしい。しかし、西横山はそれを成し得たのである。

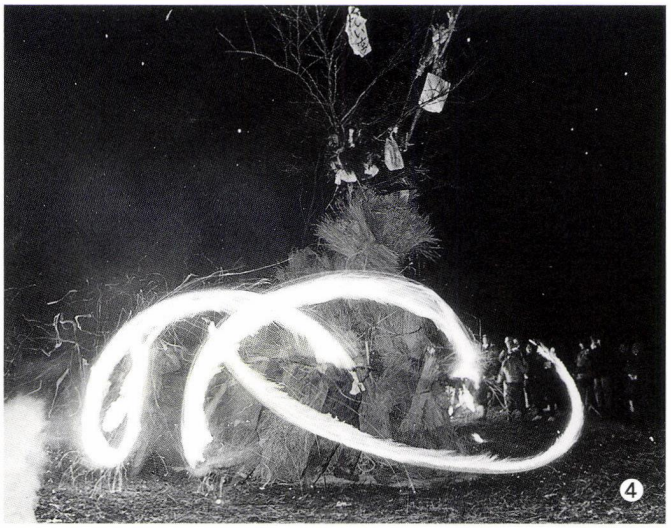


嫁祝い



焼き草集め






①②③オーマラの立ち上げ　④タイマツの叩き合い

「農村は過疎化などにより元気がないといわれていますが、西横山には過疎化も少子高齢化もありません。小正月行事によって地域にまとまりがあるため、若い者は外に出ていくことなく、全世帯の親子が同居しています。そして、鳥追いの声を絶やさないように、嫁さん方は三人ずつ子どもを生む、ということが暗黙の了解にもなっているのです。」という、西横山小正月行事保存会長の和瀬田仙二さんの力強い言葉が印象的だ。

そして、驚くべきは、三人ずつ子どもを生むことをみんなで実践しているのである。かくいう和瀬田家も、来春待望の第三子（孫さん）が誕生予定だ。しかも予定日が小正月（一月十五日）だという。なんという偶然だろうか。村の人たちの暖かい期待に応えて、きっと元気で丈夫な赤ちゃんが生まれてくるに違いない。

西横山では村の行事が少子化に歯止めをかけているのみならず、村の元気さえも取り戻したのである。このエネルギーこそが、濱谷がいう「長い歴史を経過してきた精神生活の深さ、豊かさ」に他ならないだろう。

文化財だから貴重なのではない。大切に守ってきたから文化財になったのである。指定以前も、なってからも村の宝であることにはかわりない。

形のない行事であるがゆえの苦難は、これからも立ちはだかるかも知れない。しかし、鳥追いの声を絶やしたくない、という村人の心がひとつにつながっているかぎり、桑取谷に子どもたちの大声は響き続けるであろう。



火が細ると餅やスルメなどを焼き始める

（取材編集部・中）

＊1　澁澤敬三（一八九六―一九六三）。澁澤栄一の孫。澁澤財団を継紹。日本銀行総裁・大蔵大臣などを歴任。民俗学者としても著名で、日本常民文化研究所（元アチック・ミューゼアム）を主宰、数多くの研究者を育成した。なお、最近、澁澤が昭和十年に西横山の小正月行事を採録した十六㎜フィルムが上越で上映され、話題を呼んだ。西横山の白山神社には、澁澤が揮毫した「至誠不息　神惟感格　昭和十年初夏　子爵　澁澤敬三謹書（落款）」の偏額が奉納されている。

＊2　濱谷と親交のあった堀口大學は、彼をこう形容した。「先に僕はこの人を天の写真家と呼んだ　ただ何の故であるか説明しなかった　今、それをする時がきた―詩を推し進める人だけが真の詩人と呼ばるべきだと信じてゐる自分にはこの人のやうに、たえず写真の可能を推し進める人を呼ぶに　ふさわしい名を他に見出し得ないからだ」（『越後の七人の芸術家』展によせて　昭和二十二年）

＊3　濱谷浩（一九一五―一九九九）。戦後日本を代表する写真家。戦前よりつとに写真の記録性を重視する姿勢で優れた作品を数多く残した。一九八五年、マスター・オブ・フォトグラフィー賞。一九八七年、ハッセルブラッド基金「国際写真賞」受賞。代表作は『雪国』『裏日本』『學藝諸家』『地の貌』『昭和男性諸君』など。氏の「人間が人間を理解するために、日本人が日本人を理解するために」（『裏日本』巻頭言）という言葉は、全ての作品の底流を成している思想といえよう。

＊4　現在では行われなくなった行事は次のとおりである。

十四日朝のミソギ、寺参り。

十六日朝の女の寺参り。

＊5　平成七年二月二十二日指定。市の無形民俗文化財（風俗習慣）としては、初めての指定。なお、保存会には集落全戸が加入している。

《参考文献》

和辻哲郎『風土―人間学的考察―』（岩波書店　昭和十年）

渡邊慶一「桑取村訪問記」（『頸城文化』三号　昭和二十七年）

「桑取谷の正月行事聞書」（新潟県文化財調査報告第四　『民俗資料』新潟県教育委員会　昭和三十一年）

濱谷浩『雪国』（毎日新聞社　昭和三十一年）

濱谷浩『裏日本』（新潮社　昭和三十二年）

中澤肇「春日山城と桑取谷」（『頸城文化』二九号　昭和四十五年）

「直江津市西横山桑取谷」（『無形の民俗資料　記録　第十四集　正月の行事　四』文化庁文化財保護部　昭和四十六年）

「上越市桑取谷地区」（『無形の民俗文化財記録　第七集　越佐の小正月行事』新潟県教育委員会　昭和五十七年）

天野武「桑取谷の子供組―新潟県上越市大字北谷の場合―」（『魚沼文化』二十号　昭和五十八年）

川崎市市民ミュージアム編『写真家・濱谷浩読本　―写真家・濱谷浩展解説図録―』（平成二年）

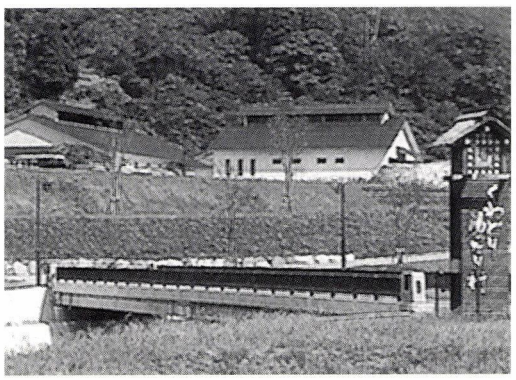
佐野眞一『旅する巨人　―宮本常一と澁澤敬三―』（文芸春秋社　平成八年）

『桑取谷文化の記録―「桑取谷文化資料（齋京守保著）―』（上越市史叢書三　上越市　平成十年）

『上越市の文化財』（上越市教育委員会　平成十一年）

『桑取谷民俗誌』（上越市史叢書四　上越市　平成十一年）

（敬称略、刊行年順）



くわどり湯ったり村

府中八幡社奉納

奉納小櫻詩

直江津附近十二景

八幡社頭深雪 はちまんしゃとうしんせつ

霊し雪も大臣棟梁の鬚の色

安国山櫻花 あんこくさんおうか

御佛が鎮め賜うや華の山

鏡池春色 かがみ(が)いけしゅんしょく

佐保姫が化粧う鏡ヶ池面かな

愛宕山風 あたごさんぷう

目離れ得ぬ頃や東風吹く愛宕山

名古浦遊興 なごのうらゆうきょう

名古の磯に乙姫のよし□□□

西本町の八幡さんに「奉納小櫻詩」直江津附近十二景と題した額が、明治三六年に掲げられた。拝殿の左上に揚がっており、どのような事情か、残念なことに落款の部分に電灯のコードを通す穴があけられている。その二年前、三四年に東洋越陳人によって春日山神社に「五智遠近詩并序」と題した二枚の大きな額が奉納された。

両者とも、今風に言えば直江津周辺のビューポイントを十二ヶ月に分け、四季それぞれの景色を詠み込んでいる。

八幡さんの額には、それぞれ詩(句)が付してあるが、高橋鴎涯という人が独特な筆致の持ち主のため読解できない字、十二景の地名と中村竹囪が詠んだ詩の関係について理解できないものがあり、二人の人物像と併せて読者のご教示を願う。越陳人の書についても詠み方がまちまちであり、こちらもお教えいただければ幸いである。

さておき、二つの十二景に共通する風景を見ると、

安国山櫻花
五智山櫻
虫生夕暮


奉納小櫻詩
直江津附近十二景
八幡社頭深雪
安國山櫻花
御傳ノ松ノ翠
鏡池春色
愛宕山風
名古浦遊興
茶屋ヶ原規鳥
林泉寺蟲干

※規鳥＝ほととぎす

茶屋ヶ原規鳥

ちゃやがはらきちょう

婢（はしため）は沓（くつ）手とりけや茶ヶ原

林泉寺蟲干

りんせんじむしぼし

其画自良に輝虎涼し林泉寺

岩戸風俗

いわとふうぞく

巫女当ら□□□□（不読）ける岩戸哉

虫生夕暮

むしゅうせきぼ

照合うは海の燐（おにび）か漁り火か

長濱藻汐

ながはまもしお

垂（た）り盡くる藻汐や安ら秋暮るる

古城秋月

こじょうしゅうげつ

其跡に空しく張れり月の弓

直江津沖奇観

なおえつおきかん

海市のた津や□□（不読）きも魚燐かと

郷湾納涼
古城秋月
福島夏月

と、春は五智の桜、夏は郷津の潮風に涼を取り、福島城址にかかる月を愛でるという、当時の人々の目に映る風景が浮かんでくる。

また、

春日山松影
東郊挿秧

という、春日山の松風や関川の東に広がる緑豊かな田園は今も変わらない風景である。

しかし、「長濱藻汐」という、秋の夕日に暮れなずむ長浜の塩焼きなど、昔日の風景である。それにしても、海市が直江津沖の奇観だったことがあるのだろうか。

明治三拾六年八月　日
中村竹囪謹詠
高橋鴎涯謹書

※挿秧＝田植え

春日山神社奉納

東洋越陳人

五智遠近詩并序

直江早春　なおえそうしゅん
春日山松影　かすがやましょうえい
五智山櫻　ごちさんおう

福島夏月　ふくしまかげつ
東郊挿秧　とうこうそうおう
郷湾納涼　ごうわんのうりょう

佐州海雲　さしゅうかいうん
妙蓋驟雨　みょうがいしゅうう
米山紅葉　べいざんこうよう

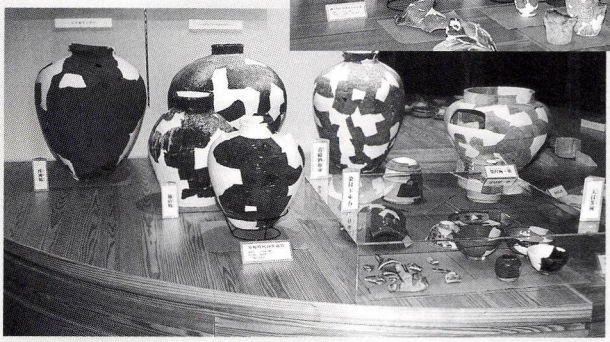
西岸帰帆　せいがんきはん
南葉漱翠　なんばそうすい
菱岳空眠　りょうがくうみん



詩文の解読にあたって、上越市史編纂室・森子朗・青木俊秀・伊丹末雄の各氏にお世話になりました。

まいぶん 埋文センター





上越市埋蔵文化財センターが、加賀街道から春日山城跡へ向かう、春日山荘の前にオープンした。堅苦しい名称なので「まいぶんセンター」と呼んでほしいとパンフにある。

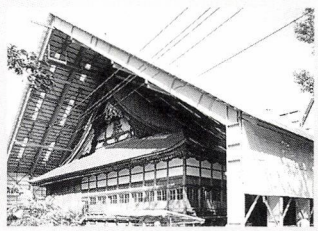
本来調査研究が主目的である埋文センターとしては展示スペースが大変広く、また、ほとんどがケースに入っていないので、縄文時代から高田城の出土品まで手を触れてしまいそうな至近距離で見ることができる。 回廊からガラス越しに復元作業の様子や大規模な収蔵庫が見学できるのも、この埋文センターならではのことである。ちなみに収蔵庫の棚は、春日山城跡保全で伐採された杉が主に使われているという。

開館時間／9：00～17：00
休館日／火曜日(祝・休日の場合は翌日)
年末年始
入　場／無料
電　話／025－521－6280

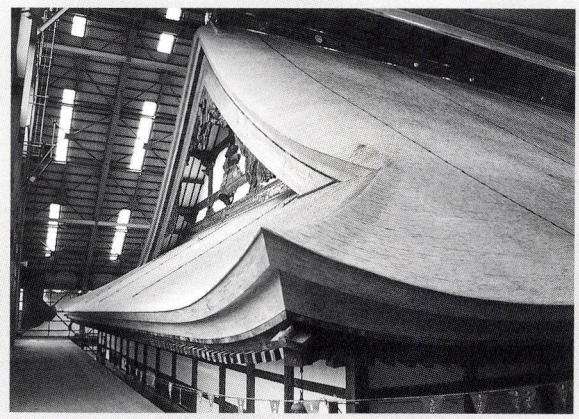
浄興寺本堂

平成16年の落慶をめざして解体復原修理が行われている寺町の浄興寺本堂（国指定重要文化財）の屋根が見事な柿葺(こけらぶ)きで仕上り、来年の雪解けとともに鉄骨の巨大な素屋根がはずされ、優美な姿を見せてくれる。

浄興寺は延宝年間(1673～81)に再建された県内最大の寺院建築で最古の真宗建築。江戸時代前期の建築様式として先駆的な試みが随所に見られ、東西本願寺と並ぶ高い格式であったことを示すものとして、平成１年、国重文に指定されている。



巨大な素屋根



フリースペース

直江津の音楽文化――その1

中井ソノ先生の思い出

箕輪　響　みのわひびき

昭和三十年代、高田に新潟大学高田分校、特設音楽科があった。地方には珍しく、クラシック音楽が響き、高い音楽文化を誇っていた。雪の降りしきる中、高田分校の講堂で、堅い木の長椅子に座って「メサイヤ」の演奏を聴いた。三瓶次郎先生の白髪を振りかざしての指揮振りが懐かしい。

その頃、高田だけでなく、直江津にも音楽の芽が芽生えていたのを忘れてはならない。

一番の功労者は当時、直江津高校の音楽教諭「中井ソノ先生」その人である。中井ソノ先生は東京音楽学校を卒業され、直江津高校の音楽教諭として授業に当たられた。クラブ活動では直江津高校混声合唱部を合唱コンクールに出場させ、新潟県代表として、毎年関東大会に駒を進めていた。夏の妙高での合宿、東京・青年館などでの演奏も大切な想い出のひとつである。合唱部の卒業生たちはその後「光響会」として今も先生の意志を受け継いで合唱活動を続けている。中井先生は授業では「青空教室」と称し、学校の裏の浜辺で歌を歌う。快い浜辺の風を受けて大声を張り上げたものである。合唱クラブでは、いつもピアノの前に座り、ピアノで伴奏しながら一緒に歌って指導された。自分で指揮をする姿は一度も見たことがない。学生指揮者が毎年育ち、指揮者と合唱を合わせて指導を受けた。聖母マリア様のように優しく、穏やかに接してくれた姿が思い出され、きつく叱られたこともない。本当の音楽とはどういうものか、という事を与えてくれた記憶が強く残っている。

中井先生の指導を得て、毎年のように音楽を志す若者が続出した。音楽を志すならば、日本の一流の大学へと先生の熱意は強かった。劣等感の固まりだった我々を「あなたなら、できます」と励ましてくださったことが忘れられない。その頃、先生の指導を受けて音楽大学に進んだ直江津高校の卒業生の数ははかりしれない。東京芸大だけで七人を数え、今でも日本の第一線で活躍している。箕輪久夫氏（声楽家・新潟大学名誉教授）竹田由彦氏（作曲家）佐藤幹一氏（声楽家・東京学芸大教授）汐澤安彦氏（指揮者）箕輪響（指揮者・上越市民吹奏楽団音楽監督）長崎悟氏・故人（トランペット奏者・元群馬交響楽団）横山（現、池田）操氏（声楽家・上越教育大学教授）の面々である。

昭和五十六年、直江津高校創立七十周年、平成三年、八十周年記念行事として二回に渡り、記念演奏会を上越文化会館で行った。私の創設したプロの吹奏楽団「東京アカデミック・ウィンドオーケストラ」を二度に渡って呼んでいただき、在校生に演奏を聴いていただいた。卒業生による手作りの音楽会である。汐澤安彦氏、箕輪響の指揮、箕輪久夫氏、横山操氏のオーケストラ・バックによるヴォーカル・ソロ、そして竹田由彦氏の「吹奏楽のためのフォーメーション」が演奏された。最後に汐澤安彦氏のアレンジによる「直江津高等学校校歌」が、全校生の合唱とともに演奏された時は、音楽の神髄と豊かさが発揮された瞬間であった。すべての源は中井先生のお力によるものである。

平成三年十一月六日、演奏会当日中井先生は元気に演奏をお聴きになってくれた。ステージに誘ってもその場を動くことなく、静かに佇まれ、全員の拍手を受けられていたのが、この写真である。

平成七年二月二十二日、その生涯を静かに全うされたが、先生の真の音楽文化の志しは







上 光響会、第一回定期演奏会記念写真
下 東京、日本青年館コンクールに参加
左 会場で拍手に答える中井先生

我々と、我々に続く多くの直江津の若者が受け継いで、育っている。

直江津は日本海の大海原を擁し、海の色、気候、波、風などの自然が四季折々に異なった風情を醸し出してくれる。越後国府の五智国分寺、上杉謙信の林泉寺など歴史ロマンの町でもある。豊かな自然と歴史ある文化人が人を作るというが、音楽をはじめ芸術関係には特にそれが生きている。そしてひとりの偉人が私達を育ててくれたことを忘れてはならない。

次回は直江津の海を歌った傑作、杉みき子作詩、竹田由彦作曲による「海の入り日」の作品、楽譜を紹介する。また、今年夏、姉妹都市、オーストリアのリリエンフェルトへ訪問演奏旅行、創立二十周年を迎えた「上越市民吹奏楽団」について語る。

プロフィール
直江津高校卒業。東京芸術大学卒業。指揮を山田一男、汐澤安彦各氏に師事。山形北高校音楽科、宮城教育大学、名古屋芸術大学、尚美学園の講師を歴任。現在、上越市民吹奏楽団音楽監督。

健康老化は人類の夢？

鍋島 陽一 なべしまよういち

生命の誕生に立会い
生命の糸を紡ぐ
ギリシャの女神
クロトー



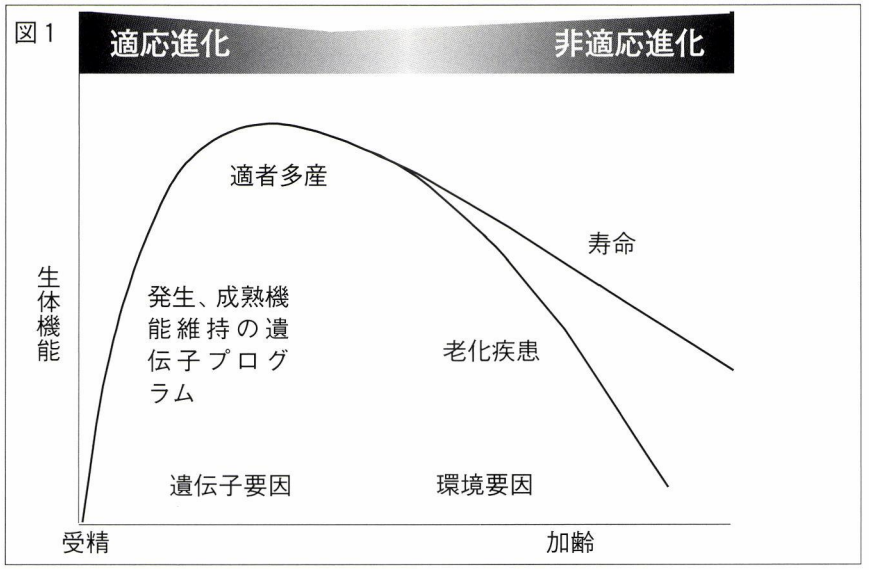
「私の霊はながく人の中にとどまらない。彼は肉に過ぎないのだ。しかし、彼の年は一二〇年であろう」（創造主の言葉『旧約聖書』創世記）

『旧約聖書』の世界では、アダムとイヴは九七〇歳であり、人の寿命は一千歳でした。ところが、人が増えたために一二〇年の寿命となったとのことです。この一節は、我々の祖先は寿命に大きな関心を寄せていたこと、そして、老い、死を恐れていたことを物語っています。同時に、キリスト教に限らず、宗教の勃興と隆盛は「死に対峙した人々が抱いた神に対する畏敬の念」と切り離せないことを示しています。

どうやら、有史以来、若さを保ち老化を免れることは、人類の夢でありつづけたようです。しかし、何人も老い、死から逃れることはできませんでした。人間は老いと死を神の思し召しとして受け入れることにより存在してきました。

一方、生物のあり方は地球における生物の歴史を反映しており、我々の一生は進化の歴史に深く彩られています。たとえば、地球では大気中の酸素濃度が上昇し、強い細胞障害性をもつ活性酸素の発生を引き起こしましたが、生物は酸素を水に変換し、同時に酸素をエネルギーの合成に活用することによって酸素分圧を下げる作戦に成功し、今日に至っています。また、海から陸上への進出は呼吸・循環機能、水分・電解質を保持調節する機能など、生体恒常性の維持機構の飛躍的発展なしにはなし得ませんでした。これらの機能は肺、腎臓、骨、循環器系などの機能進化に依存しています。進化をとおして生物は限られた遺伝子情報を用いて発生・成熟・個体維持のプログラムと次の世代へ遺伝子を伝える優れたメカニズムを獲得してきました（図1 適応進化プロセス）。しかし、過去に行われてきた議論で明らかなように、この適応進化のメカニズムが老化過程にまでおよび、老化を制御する遺伝子プログラムを作り出したと考えるのは困難です。なぜなら、老化プロセスの制御は種の保存に必須である〈遺伝子の継承〉に基本的には関わっていないと考えられるからです（図1 非適応進化プロセス）。

確かに、発生過程に比べて老化過程、特に個々の老化症状の現れ方は個体による差異が大きいように見えます。しかし、ヒトは一定期間に老化し死を迎えます。また、たとえ個体による差異があるとはいえ、それぞれの種に固有の寿命と老化過程があります。この他にも老化が遺伝的に規定されていることを示唆する多くの証拠があります。これらの事実を総合すると、進化の過程で獲得した遺伝形



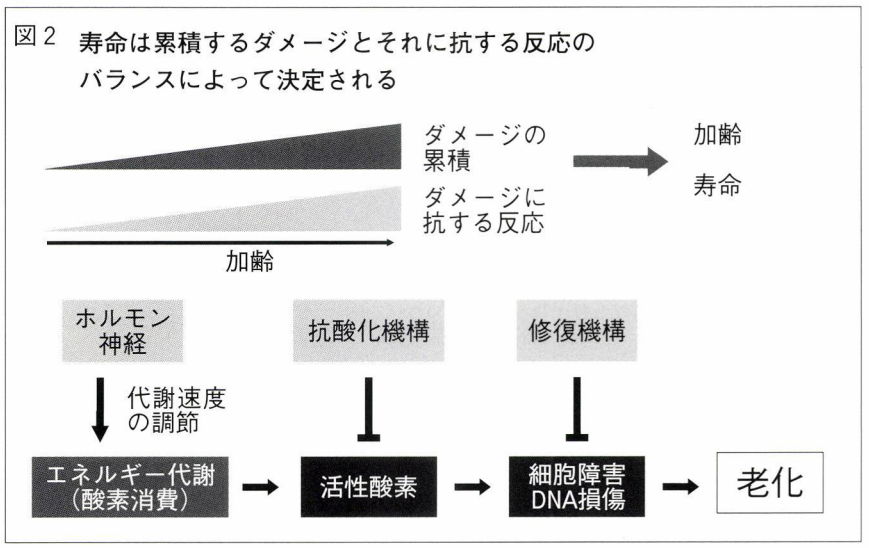
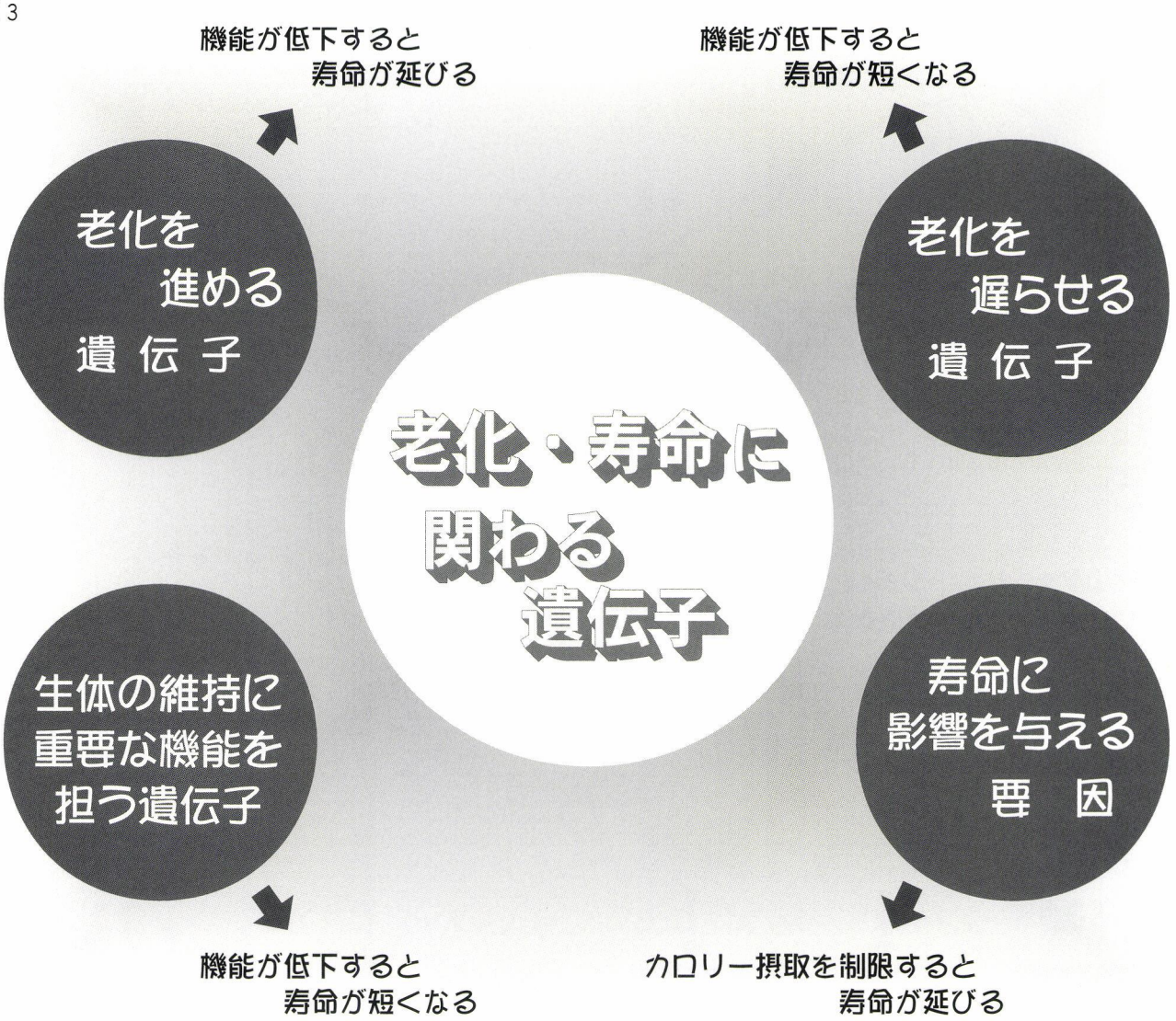


図3



質、発生と成熟と個体生存の遺伝子システムのなかに老化過程、すなわち、〈次の世代へ遺伝子を伝えた後〉に老化し、死に至るプロセスを副次的に規定する遺伝子が潜んでいると推定せざるをえません。

右のことからもお分かりのように、〈老化〉を規定する遺伝子の研究は、発生や成熟機構を制御する遺伝子の研究に比べて複雑であり困難であることを示しています。事実、人類は、その歴史を通して加齢に伴う変化について多くの知識を蓄積してきましたが、多様な現象をどのように捕らえるかを巡る議論は尽きず、長く、老化は加齢に伴う生理機能の減退に伴う複合的な過程であると捉えられてきました。

しかし、最近の生物学の進歩は老化研究に新たな視点を与え、「ダメージの蓄積とダメージに抗する力のバランスによって老化、寿命が決定されている」との老化仮説（図2）が登場してきました。この仮説はこれまで議論されてきた多くの老化、寿命の決定要因を包含しており、共通の理解が得られつつあります。老化を進める遺伝子はダメージの蓄積に関わっており、遅らせる遺伝子はダメージに抗する力に関わっていると考えられています（図3）。

また、老化や寿命に影響を与える生活習慣が問題となっており、サプリメントの服用が流行っていますが、これらの多くはダメージの蓄積、ダメージに抗する力に関係していることがわかってきております。

このように老化研究の最近の進歩は著しい

ものがありますが、私は、ヒトの多彩な老化症状によく似た症状をもつ変異マウスを発見し、その原因遺伝子をKlothoと名付けました（図4）。

クロトーとはギリシャ神話の運命の三女神の一人で「生命の誕生に立ち会い、生命の糸を紡ぐ女神」の名前です。

クロトー蛋白はカルシウム・電解質濃度を一定に保つことに必須であり、同時に、体を形作っている細胞や組織を防御することに機能していると考えられています。事実クロトー遺伝子を欠失したマウスでは動脈硬化、骨密度の低下、肺気腫、皮膚の老化などの老化に関連する症状が顕著となります。カルシウムなどの電解質は、生体内のあらゆる現象の制御に関わっており、その濃度を厳密に保つことなしに、生存することはできません

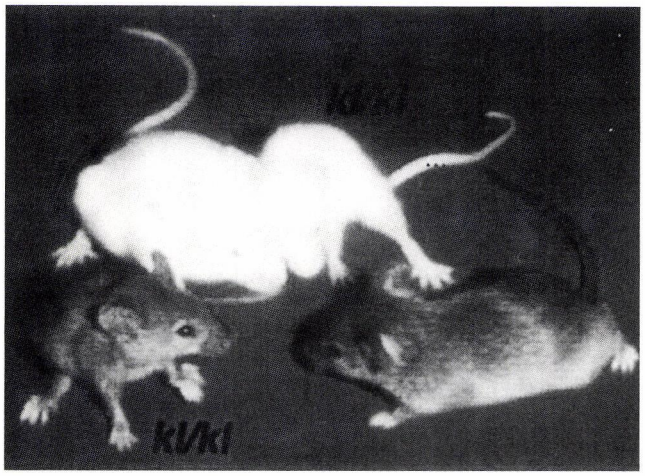


図4　多彩な老化症状を呈するKlotho異変マウス（kL/kL）

（図3　生体の維持に重要な機能を担う遺伝子に相当）。ヒトは、その恒常性を保つ極めて精巧なシステムとその恒常性の変化の影響から細胞や組織を護るシステムを発展させてきました。この生命の糸を紡ぐ遺伝子の機能低下は、加齢疾患の発症、個体の死に深く関わることとなったわけです。

ヨーロッパを旅すると、各地の教会や街角の壁面に「死の舞踏」と称される壁画が残されています。中世に盛んに描かれたものです。死の舞踏の世界では、〈死に神〉は三本の矢を携えて青い馬に乗ってやってきます。支配階級であった僧侶や領主は死の恐怖に恐れおののき、傷ついた弱き者は神の慈悲のもとにあります。三本の矢は〈貧困・疫病・戦争〉を現していると伝えられています。

現代においても〈貧困・疫病・戦争〉が、人々に死を迫っていることには変わりありません。これらの貧困・疫病・戦争は、人類の営みが作り出した死の要因です。少し前までは多くの人間は老いることとは別に、このような要因で死を迎えていました。これは取り除くことができる要因であると言えます。

老いの恐怖が、そして若さを保つことへの願望が、人々の共通のものとなったのは最近のことです。しかし、これも地球上の限られた地域に住む少数派のものです。依然として多くの人々が貧困、疫病、戦争による死の恐怖にさらされており、老いによる死を享受できないのです。

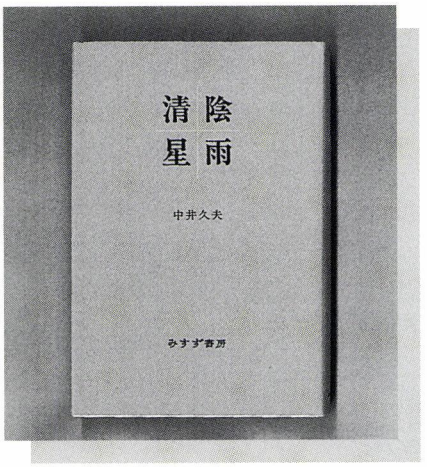
私はふとしたきっかけでクロトー遺伝子を研究することになり、〈老化・死〉を研究対象の一つとすることとなりました。幸いなことに、私はこの研究を始めたことによって、一二〇年のヒトの寿命のこと、ドーキンスの唱えたミーム（人の営みによって人が後世に継承するものを現す）のこと、〈老いを迎えた人間（遺伝子を継承した後の人間）にとって、生きる意義とは何か〉を問い続けることを強いられる楽しい日々を送ることとなったわけです。

人は遺伝子とミームを受け継ぎ、次の世代に継承する存在です。時には逃れることのできない老いと対峙しながら、生きることの意味を考えてみるのもよいのではないでしょうか。

老いによる死を享受できることに感謝しながら。

プロフィール
一九四六年　上越市（直江津）生
一九六五年　直江津高校卒業
一九七二年　新潟大学医学部卒業
一九七六年　新潟大学大学院医学研究科博士課程修了
医学博士（新潟大学）
新潟大学医学部助手（生化学）
一九八四年　癌研究会癌研究所研究員
一九八七年　厚生省国立・精神神経センター　神経研究所遺伝子工学研究部長
一九九七年　大阪大学細胞生体工学センター　教授
一九九八年　京都大学大学院医学研究科　教授

■読書びと



清陰星雨

中井久夫著

みすず書房刊
（二五〇〇円）

旧い友人と毎年如月に、雪の秘湯巡りをして四方山話をする。信州大学の医学部を離れ、伊那谷に移り住んだ精神科医の我が畏友は、その男のことを「あの人は凄い」と言い続けてきた。

中井久夫は一九三四年奈良県に生まれる。京都大学法学部を経て医学部を卒業。一九六六年にウィルス学の研究者より転向し臨床精神科医を志し、東大分院（昨年廃止されたこのユニークな病院については要注目）で研修を積む。そして硬骨の医師青木義作の開いた調布市の青木病院での九年間の勤務が、開放病棟に拘りぬいた中井の軌跡を決定づけた。その後は長く神戸大学精神神経科を主催、統合失調症と回復過程の問題を中心にその治療可能性に打ち込みながら、病棟の設計建設や医局経営にも辣腕をふるう。阪神淡路大震災後には「こころのケアセンター」を立ち上げ、現在は甲南大学文学部人間科学科教授として、多方面と連携してカウンセリングとケーススタディに取り組んでいる。

地震のその日から僅か二ヶ月後に出版された『1995年1月・神戸―「阪神大震災」下の精神科医たち』（中井久夫編著・みすず書房）は、まさに衝撃的な一冊だった。

患者の治療、被災者の心のケアに全力を尽しながら、厚生省前進本部の「神戸の精神科医師は足りている」の報告を黙殺し、各地にボランティア（志願兵）医師を動員依頼する中井の決断。

往診で知り抜いた街の記憶を、大渋滞の中を最短で大学病院に到達するためのルートマップの絵地図に生かし配布。温泉地と交渉し、全スタッフをローテーションを組んで休養させる。兵站という言葉本来の行動を貫く中井。同時に、災害精神医学の共同研究を組織し、救急チーム四十人のリアルタイムのレポートを編み緊急出版した。明日起こる「9・11」に備える責務を実行する。〈凄い〉はそういうことであった。

「一九八九年に冷戦が終わり、驚くべき一致で昭和天皇が逝去した。」と書き出される『清陰星雨』は二〇〇二年四月に上梓された。

カヴァフィスやリッツォスなどの現代ギリシャ詩人の訳業でも知られる中井が、年に四回神戸新聞にその言葉を選び、十二年にわたり書き紡いだエッセイが纏められている。珠玉の四七編のほとんどに、時を経て今どう考えるかというコメントが添えられ、多様な拡がりが逆に定点観測地に降ろされた錘鉛の重さを実感させる。

震災以前の時期に書かれた文章には、スコットランドやオランダの印象、過疎地医療に散った友への追悼、外国語との様様な出会い、幼少年期や学生時代の回想、などが上質のユーモアに彩られながら透徹した感受性で綴られている。

そして繰り返して語られる、社会主義と同時に福祉国家もケインズ主義も終り、日本という国が漠然と夢想した存在価値も霧消した、世界は古い怨恨が再燃し、最後の審判まで〝悪無限〟が続くのではないか、という省察と嘆息。

自身が積み重ねてきた経験や知識を封じ、敢えて果てない迷宮に踏み込む中井が見る景色こそ、凡百の文化官僚達には無縁なものと言える。

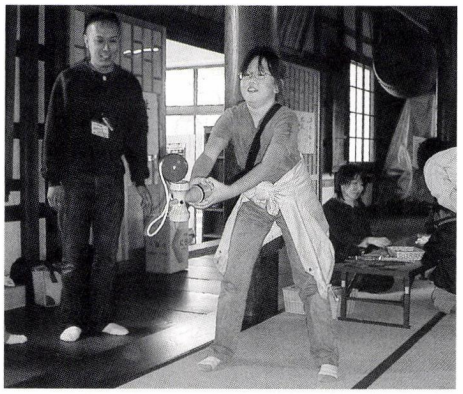
出色なのは、日露戦争後の朝鮮統治に異議申立てをし、軍籍を離れ中国を彷徨った（『城下の人』の著者、石光真清を髣髴とさせる）父方の祖父と、奈良盆地で政治、経済、趣味、芸術に八面六臂に生き切り、魯迅の『両地書』を臨終の床に抱いた母方の祖父、の二人の明治人を愛おしく描く二編である。書名に込められた、すがすがしい持久戦を二十一世紀に展開する中井久夫の遠い援軍と思わずにはいられない。

併せて、浩瀚な精神医学書だが〈いじめ〉も含めすべての悪夢と真に向き合うため『心的外傷と回復』（J・L・ハーマン／中井久夫訳・みすず書房）を図書館で閲覧してみよう。（身）

直江の津 ―つながりとまじわり

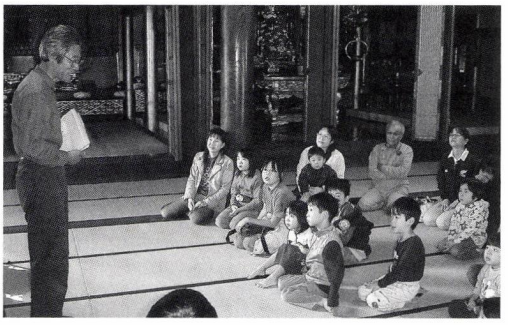
むかし遊びとお話の会

10月27日／林正寺本堂

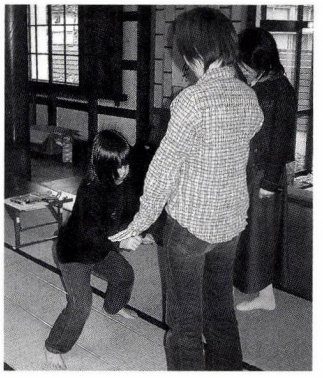


けん玉に挑戦





ジャックの会によるお話の朗読



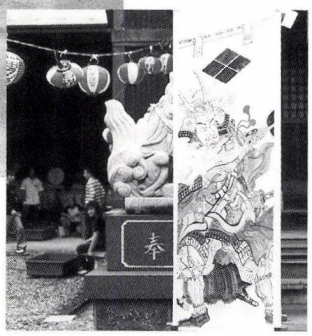
11月2日予定の「直江の津　はっけん　たんけん　たいけん隊」は、風雨のため中止になった。

ミニ特集

この秋 直江津のまちで やったこと

7月に行われた直江津スタンプ会による〈船見公園夏祭り〉を皮切りに、上越ＴＭＯが支援するイベントが次々に行われた。行事が集中した10月後半は、例年にない風雨と寒さで、多少盛り上がりに欠けることもあったようだが、一連のイベントで「直江津って、がんばってるよね」という声をたびたび聞くことがあった。その当否はともかく、わが「直江の津」で〈何かしよう〉というどんな動きがあったのか、写真で紹介してみようと思う。





安国寺稲荷神社・府中八幡の秋祭りを演出した西部商工振興会

遊びの達人によるけん玉の技の伝授や読み聞かせ、駄菓子屋も開かれて、大勢の親子が一時を楽しんだ。

あいもの祭り

11月3日／中央商店街

四十物と書いて「あいもの」と読み、鮮魚と塩魚の中間の物。当日は、炭火焼の体験もあり、いい匂いが漂っていた。またスタンプラリーの抽選など、あいにくの雨にもかかわらず、たくさんの客が訪れた。旧柿村書店で同時開催として「直江津今町が生んだ偉大な数学者　小林百哺展」と銘打って、一週間にわたって百哺関連の資料が展示され人々の興味をひいた。

同日、すっかり有名になったかわいい小屋が並ぶ駅前の空き地で、恒例の「互の市」が開かれ、北海道の畜産の父であり直江津では近代工業の先駆者であるエドウィン・ダンにちなんだフェアが開催されて、北海道の物産の即売やアメリカンカジュアルウエアのセールも行われた。





四十物やおにぎり・きのこ汁セットの即売でにぎわった

なおえつ　まちなか市座

互の市

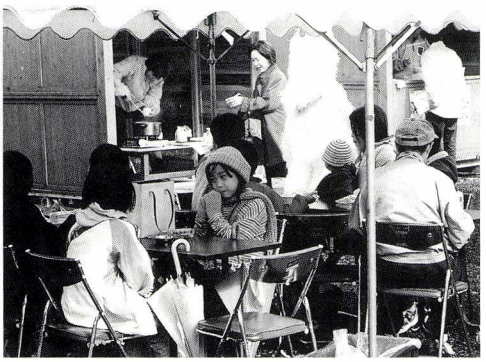
毎月5の日

エドウィン・ダン　フェア　同時開催

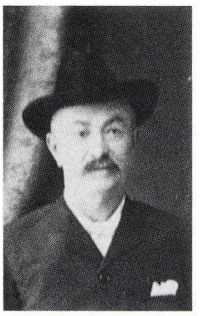
11月3日



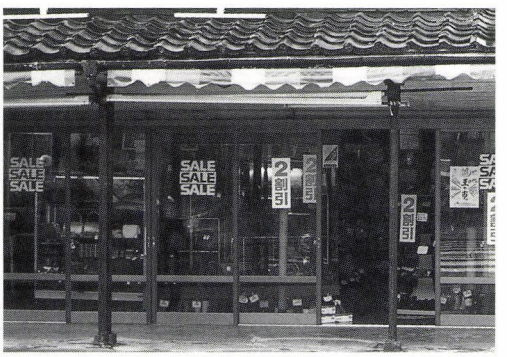
百哺関連の資料が展示された



北海道のおいしいものが販売された



エドウィン・ダン



協賛で当日限りのセールをする商店

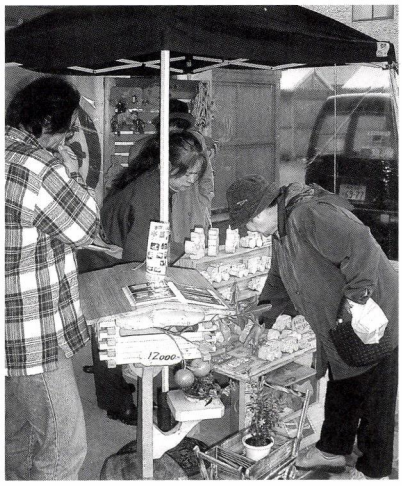
直江の津　つながりと　まじわり

アート縁日 in 直江の津

11月9・10日
駅前商店街



レストランのショーウインドウに展示された作品



作品の販売も行われた

火災からお御堂を守ろうという、全国的にも珍しい土蔵造りの寺院を生かした、まちの再発見の一環として真行寺本堂で説経浄瑠璃の公演が行われ、ご当地ソング「さんせう太夫」に涙した人もいた。当日は明かりの演出や大根炊きのサービスもあり、思いがけない寒さのなか、来場者をほっとさせていた。

9・10日は、駅前商店街の店舗の一角や空き店舗を利用して、手作り作品の展示や販売が行われ、作品鑑賞や作り方の説明を受ける人、買い求める人などで、お客、出展者、会場提供者で、二日間の縁日を楽しんだ。

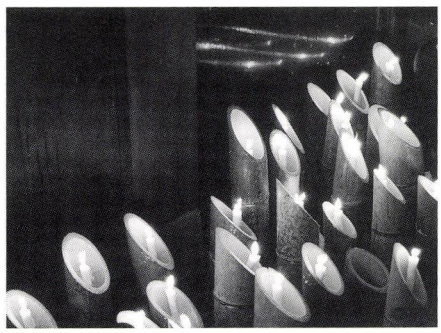


会場の計らいでご本尊を背に演奏

直江の津　つながりと　まじわり

さんせう太夫を聴く 説経浄瑠璃コンサート

11月9日　昼・夜／真行寺本堂



竹に蝋燭を灯す明かりの演出もあつた



お斎？　で大根炊きも出される

三代目家元　若松若太夫
（東京都無形文化財保持者）

- さんせう太夫一代記　親子対面の段
- 弁慶主従一代記　安宅の段

海西東陸



稲刈りが機械化されて、「ハサ」で稲を干す光景をまったくと言っていいほど見かけなくなってしまった。そのうえ、田んぼの大型化工事で畦のハンノキが切られて姿を消してしまい、たまに景観の修景と称して、新しい畦に移植してあるのを見かけても、妙に整然と植えられていて、不自然な感じがする。

最近のブランド志向で、米の袋に〈天日干し〉などと書かれているのは、どこで干しているのだろうか。自然乾燥がおいしいのは、乾燥に時間がかかるため、その間に葉や茎にある栄養分がモミに移るためだといわれている。

読者諸氏には、この稲の干し方が各地で違うことは、先刻ご存知のことと思うが、当たり前のように見ていた「ハンノキのハサ木」は、どの辺りまであるのだろうか。

たとえば長野県は、三脚を二つ立てて、胸くらいの高さに竹竿を渡して掛ける光景を見かける。東北へ行くと「くいがけ」といって、杭に束ねた稲を巻くようにして掛けていく。これも蓑のように掛ける方法とプロペラが重なったようにする方法があるようだ。また、刈り取った後の田んぼに直に、束ねた稲をひねるようにして立てて乾かす所もある。これは一番古い方法で、切り口から雨水が入ると腐ったり芽が出たりするので、ころあいを見て天地をひっくり返すということである。

稲束を横並びに掛けていく木の組み方を東北では「ハセ」、この辺りでは「ハサ・ハザ」といい、これらは何段にも掛けるようになっている。一段のものは、山梨県では「ウシ」と言うらしいが、「ウマ」と言う地方もあるらしく、農耕に使う動物の違いが、こんなところに現れているのかもしれない。

ちなみに庄内農事試験所の話では、「ハサは南北方向に伸ばして組むと、午前中は東側、午後は西側に日があたってよく乾く」ということである。ということは、庄内地方では秋になると、そのたびに「ハサ」を組んでいたらしいことが分かるのだが、そうなると、移動できない立木をハサ木にしていたこの地方は、どのようになっていたのだろうか？　南北ばかりとは思えないのだが……。また、ハサがけになったのは、大量に稲を干す必要がある穀倉地帯だったからだろうか。しかし、根が生えた立木を使った意味がわからない。

かつて、京都に住む「万葉学者」を何度か訪ねることがあった。カッコを付けたのは、私が目にした学者は、日がな読書三昧だけの人であったためである。

それはともかく、あるとき、

「君の地方では、稲をどうやって干すんですか？」

と、質問された。

「はっ？」

「稲の干し方で、稲作の伝播が分かるかもしれない。それによって、万葉歌の意味が読み取れるのではないか、と思ってね」

かろうじて答えたものの、何も知らない若者にとって、突然の質問は何のことやらさっぱり分からなかった。しかし、そのことが今もって、「稲を干すかたち」について考えさせられることになった。

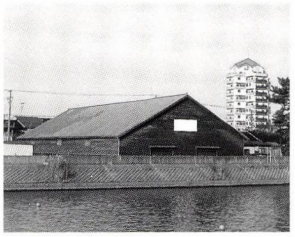
（潘）

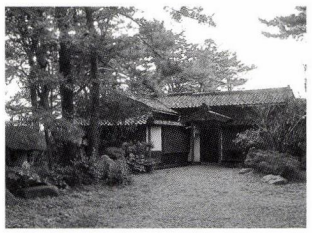
屋台まち

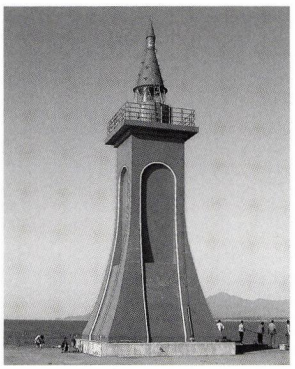
「直江津」とはなにか？
現在、祇園祭に屋台を出す町名の元になったのは、昭和27年の町内統合にあります。後に、祇園祭の神輿が巡幸しない町内も屋台を出すようになり、今のような19町になりました。
祇園祭に屋台を出さなければ「直江津」じゃないのか？
という反論を覚悟で、屋台を通して町内を訪ねることによって「直江津」が読み取れるのではないか、という大胆な仮説（？）のもとに取材してみました。

港町
みなとちょう

●まちのめじるし●







保倉川沿いの倉庫と上越で一番高い建物（マンション）
旧家の立派な庭
赤い灯台

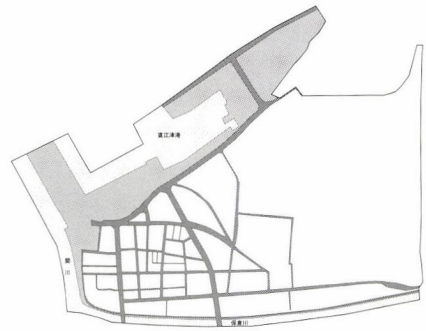
旧町名「古城区」からも分かるように、福島城の城跡で、古城小学校の校庭には「福島城址」の碑が建っています。またグラウンドのところどころには、石垣の石が頭を出しているといいます。その広大な跡地が明治以降、港と近代工業地帯に変貌しました。

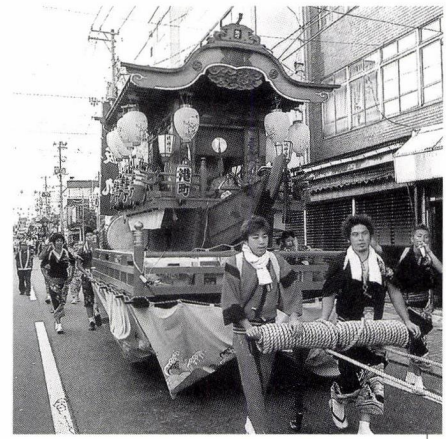
港町では、昭和30年代まで5台の屋台が出ていたと言われています。これは、現在も大手の工場ばかりではなく中小の鉄工所、60以上の港に関わる事業所がありますが、このような地域の特質が、何台もの屋台を出す力になったと言えるでしょう。

一時期、屋台巡行を止めていましたが、まちの人たちに、どうしても屋台を復活させたいという機運が高まり、それに続いて青年会が川原町の屋台を貰い受けて始めたものが、町全体の屋台へと一つになりました。

後に少しでも屋台に華を添えようと、女装でお面を付け屋台の先で踊りはじめ、今では港町屋台の名物ともなっています。

残る屋台の一台は、荒川町に譲られています。

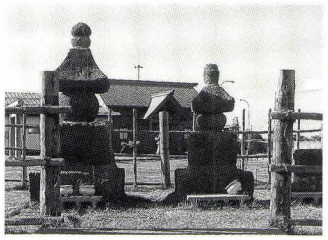




港町の屋台

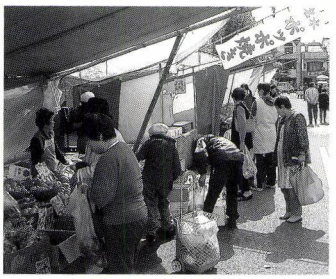
●まちのめじるし●

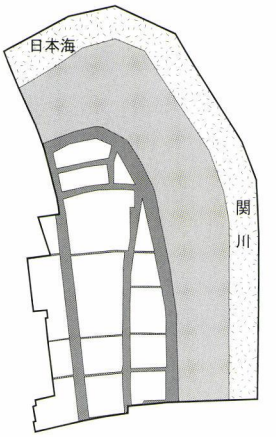
荒川町
あらかわちょう

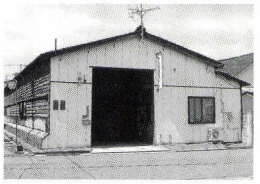


荒川町はもとの新川端区、川端区、諏訪区から成り立っています。

関川（荒川）の改修で浜線や旧新川端区のまち筋が無くなって川幅が広がり、整備された川辺では、釣りや散歩する人たちを見かけます。また荒川橋畔には、祇園の神輿を上陸させる岸壁もできて、当夜は昔のような賑やかさをとり戻しています。その分、河口周辺がかつて港であった面影はどこにも見当たりませんが、一歩町内に入ると、船の積荷を保管する倉庫がまだ残っていたり、別称着船寺と言われる聴信寺が、ここが港のまちであったことを物語ってくれます。









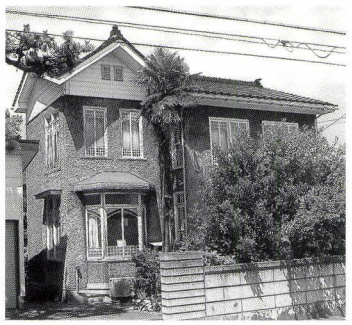
荒川町の屋台

もともと各区ごとに屋台がありましたが、現在は、台車は川端区、上物は当初、新川端区のものを使用していましたが、傷みが激しくなったため港町のものを貰い受けています（昭和40年頃）。この時から屋台の形式が舟形になりました。

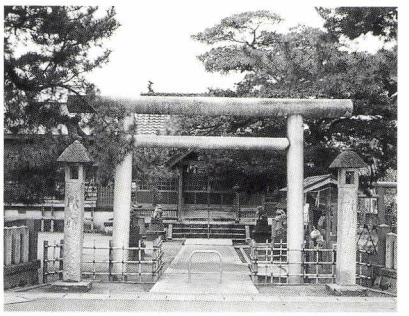
お饌米納めに行われる紙吹雪は荒川町が最初だと言われています。また「嫁に来るなら荒川町」というキャッチフレーズもすっかりおなじみになっています。

上 安寿と厨子王の供養塔
中 にぎわう三八の市
下 港の面影を残す倉庫

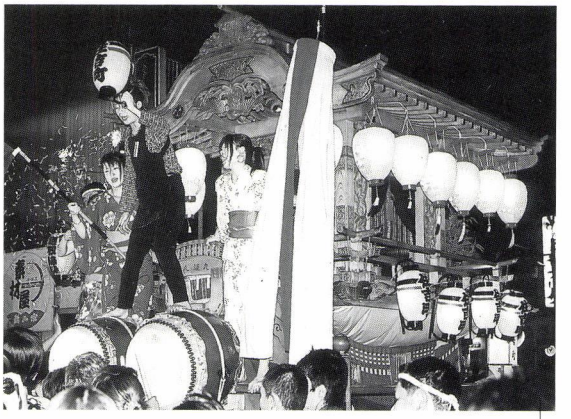
●まちのめじるし●



洋館の家

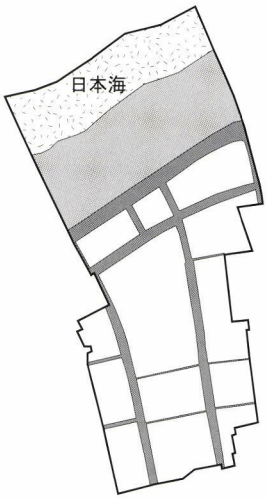


住吉神社



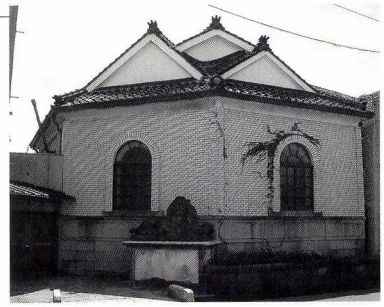
住吉町の屋台

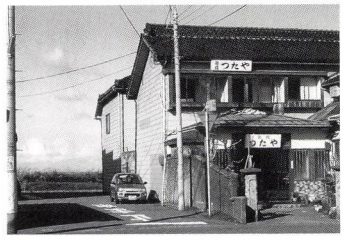
天王町
てんのうちょう



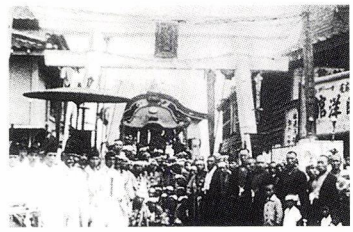
●まちのめじるし●


天王町の屋台





上 ライオン像のある建物
左 天王小路
下 昭和初めの天王小路



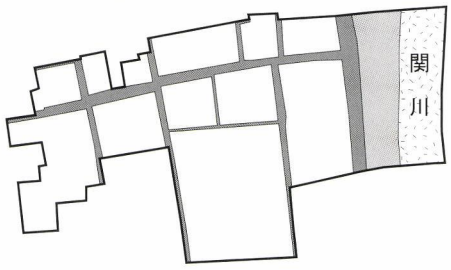
天王町はかつての中区、中島区、片原区からなります。

町名は、以前に祇園の神輿のお旅所が置かれた、つたや旅館脇の天王小路（てんのうこうじ）に由来し、町名に宮元であるというプライドがうかがえます。（祇園の神様、牛頭天王をお天王さまと呼ぶ）

三つの町は、ライオン像のある回漕店に象徴されるように、明治以降、日本の経済の一角を担う直江津の海運・海産物商が集中し、また、それらを支えるまちとして生きてきました。

屋台は、各区がそれぞれに保有していましたが、中島区のものを天王町の屋台として残し、片原区のものは春日新田へ、中区のものは解体処分されました。現在もこの当時の屋台が使われていて、屋台に乗っている兜は、昔「中島区が少年野球大会で優勝した時」に記念品として貰ったもので、現在の兜は傷みのひどくなった初代に代わり、八坂神社から寄贈されたものです。

住吉町
すみよしちょう



江戸時代、寄町は小揚（こあげ）といわれる同業者の住む町でした。小揚とは、北前船などから積荷を小船に降ろして問屋に運ぶ職種で、ほとんどの町民が従事していました。

その寄町が現在の住吉町です。町内統合の際も寄区が単独で住吉町になり、今も変わっていません。

町名は町内にある住吉神社に由来します。住吉神社は海運の神様で、阿波の国（徳島県）の藍商人が海上安全を願って一対の燈籠を、大阪と阿波の藍染め商人が手水鉢を境内に寄進しています。

住吉町の屋台は、曙と安国寺と合わせて三兄弟と言われており、いずれも同じ宮大工（西本町 片田さん）によって作られました。住吉町が中でも一番新しく、昭和34年に製作されています。

祇園祭に関わらず町内の結束が強いのは、職能集団のまちの性格を色濃く残しているせいかもしれません。

取材・江塚

目見る（みるめ）

文安三年銘　府中八幡宮　鰐口

「はちまんさん」で親しまれている府中八幡宮の本殿の屋根は、今はトタンに覆われていますが、古格の風を垣間見ることができます。そして拝殿の前庭に、ほとんど表情が読み取れないほど風化した一対の狛犬が置かれています。室町時代の作ではないかといわれていますが、正確なところはわかりません。しかし、府中八幡宮が古い歴史を持った神社であることを物語るものといえましょう。

八幡宮は、社伝によれば養老四年（七二〇）勅命によって九州の宇佐八幡を勧請し、貞観元年（八五九）に岩清水八幡をも合祀したといわれ、源義家の奥州阿倍貞任征伐の折に立ち寄って祈願したと伝えられています。これは「義経記」に見える華園観音堂（華園寺・観音寺）の縁起と通じる伝承といえます。

後に、長尾為景が春日山城の鬼門守護の社として五百石の社領を寄進し、上杉謙信も篤く敬ったと伝えられています。今も社殿には、上杉輝虎（謙信）の署名がある「総社・八幡・諏訪」と題する額が掲げられています。

府中八幡宮は上杉謙信の跡目争いである天正七年（一五七九）の「御館の乱」で焼失したといわれていますが、江戸時代になって、幕府から百石の朱印地を与えられ、また高田城主松平忠輝や松平光長以来、歴代の高田藩主の崇敬を集めました。

『頸城郡誌稿』に「戊辰ノ役ニモ北陸道勅使ノ三卿ヨリ、目録ヲ奉納アッテ奉幣ノ式アリ」とありますので、明治維新の人々にも八幡神が弓矢の神として崇められていたことがわかります。

この府中八幡宮に文安三年（一四四六）銘の鰐口が伝えられています。

鰐口とは、寺社の入り口に吊るして、参拝者が布の綱で打ち鳴らす円形・扁平の金属楽器で、下辺の大きく開けられた口の形から名づけられたもので、金鼓（こんく）ともいわれます。

府中八幡社に伝わる鰐口は、銅製で大変保存状態がよく、先の年号と銘文が刻まれており、県の文化財に指定されています。

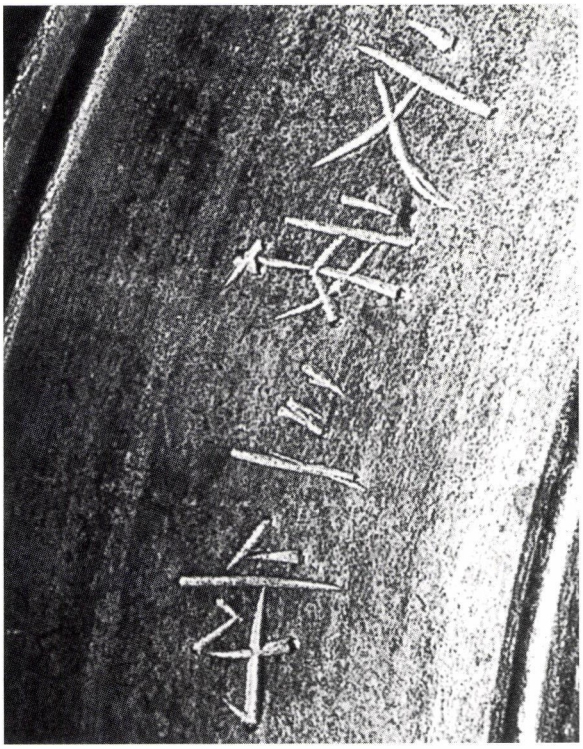
撞座（つきざ）の蓮華文を中心にして、三重の圏（けん）文がめぐり、銘文は次のように刻まれています。

奉施入鰐口岡前寺千手観音越後州（こしのこうしゅう）
頸城郡　府中　右所願成就皆令満
足故也
文安三年六月□日　施主道圓敬白

この銘文によって、文安三年六月に道圓という僧が、所願成就の礼として岡前寺（おかのまえでら）の千手観音に、この鰐口を奉納したものであることが分かります。

それではなぜ、岡前寺に奉納された鰐口が府中八幡宮に伝えられているのでしょうか。

八幡宮に残る江戸時代の絵図に「府中岡前寺　屋敷」の名があり、八幡宮の神





宮寺（神仏習合で神社に置かれた寺院）と伝えられており、御館の乱で寺社ともに焼失しましたが、岡前寺は再建されることがなかったものと考えられています。

八幡宮にこの鰐口が伝えられてきたのは、推定どおり岡前寺が府中八幡の神宮寺であることを物語る証といえます。

一つの鰐口が、府中八幡宮とそれにまつわる中世越後府中の景観と、その「謎解き」の言葉を語りかけているようです。

（左）

岡前寺の読み方は『上越市の文化財』（上越市教育委員会）に拠った。

参考

「上越市史研究」六号（上越市市史編纂室）

『上越市の文化財』（上越市教育委員会）

写真『上越市の文化財』より

■新潟県指定文化財

種　別　工芸品

指　定　昭和五七年三月

所有者　府中八幡宮

直　径　四八cm

厚　さ　一二・五cm

読者から

十一月に親戚に所用があって久しぶりに直江津駅に降り、駅舎のあまりの変貌ぶりにびっくりした。建物そのものはどうかと思ったが、駅のホーム沿いに西のほうへ延びる道路と歩道の街路樹の景観は珍しかったし、広場のブロンズ像もなかなかいい。

当日、駅前の商店街で「アート縁日」という催し物をやっていた。商店や最近日本中にある空き店舗を利用して、作品を展示したり販売するのだという。見ようと思ったのだが、風雨とあまりの寒さ（私にとって）に、ほとんど通り過ぎてしまった。もっといい季節にやればいいのにと思った。それにしてもカメラ屋だったか、ショーウインドを隠して作品の絵を掛けているところがあり、意気込みを感じさせられた。

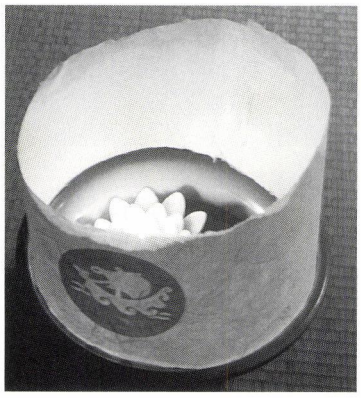
商店のガラス戸に「説経浄瑠璃コンサート」と言うポスターを見た。説経浄瑠璃を聞いたことはないが、コンサートとは変な言い方だと思った。しかし面白い表現だと思った。直江津は火事が多くお寺が土蔵になっていると、チラシに書いてあった。それをまちづくりに生かそうと言うことらしい。演目が「さんせう太夫」（山椒大夫のことらしい）と言うことで、縁（ゆかり）の「安寿と厨子王」の話なので聴いてみたかった。

目的の親戚へ行くにはまだ時間があったので、会場の真行寺というお寺まで行って見た。確かに土蔵の立派な建物らしいが、なぜか境内いっぱいの車で入るのをやめて戻ってしまった。（当日午前中は幼稚園の参観日だった・編）

戻る道、川沿いの菓子屋で「継続団子」を買った。親戚が土産に持ってきてくれる串団子だ。その隣に火災の焼け跡の空き地と聞いたが、カラフルな小屋を並べて何か販売をやっていた。その向かいの「なおえつ茶屋」で「直江の津」と言う雑誌を買った。

典型的なさびれ方の商店街で、催しがあり、コンサートがある。そして変な店があり、変な雑誌があり……、偶々そんな日に遭遇したのかも知れないが、まちおこしと言うより、よほど〝拘りの人達がいるまち〟と見たが、誤解だったろうか……。

ちょっと、直江津での感想を書いてみました。高崎市の人。



■編集室から■

くわどり湯ったり村ができて、桑取谷へ行く機会が多くなった。同じ市内でも、その昔は、冬などよほど必要ない限り、とても行くなどということはなかった。温泉施設ができてから、ときどき行ってみると、四季の表情がとても豊かなことに気がつく。桑取の小正月行事も、日々の生活の中で生かされていれば、あえて守る必要もなく守られていく、とは単純すぎる物言いだとは思うが、「冬が解ける」というように春めく様子を見ていると、この谷に生きていく人たちの豊かさをしみじみ感じる。そのようにして、これからも小正月行事が続けられていくのであろう。

鍋島先生にはご多忙のなか、無理に書いていただいた。命の糸を紡ぐ女神「クロトー」は生命の不思議を感じさせる。

全ての人に老による死の日を。

そして箕輪氏からは興味深い投稿を頂戴できた。

多くの方々の投稿、情報をお待ちしている。

年間定期購読（四冊一九二〇円・送料込み）を受け付けております。ご希望の方は編集部までご連絡ください。

読者から

秋号の特集「直江津五智遊覧の旅」は、パノラマを見るようで大変興味深く拝見しました。昔の五智周辺の賑わいが彷彿とさせられます。（国府・山田）

＊

江塚氏の「直江津の再生」は、もっとスペースをとってやったほうがいい。卒論と言うことだが、これからも研鑽を深めて、まちに役立ててほしいものである。（市外の住人）

＊

巻頭エッセイは、筆者のそれぞれの直江津への思いが出ていて、面白く読ませてもらっています。関さんのエッセイはメルヘンの世界でしたし、私のようなものには知らない世界でした。それにしても、どのようにして書いていただいているのでしょうか。（詠人不知）

投稿募集・内容の問合せ

投稿をお待ちしています。企画、執筆者への感想・意見・反論・身近な随想など、気軽にお寄せください。

フリースペースは、研究論文・提言・意見発表・創作発表の場です。テーマは自由ですが掲載について、多少の審査を行いますことをご了承ください。掲載文には僅かですがお礼をさし上げます。

投稿には、お名前・年齢・住所・電話番号を明記してください。フリースペース以外は匿名も可能ですが、その場合も氏名・住所をお書きください。

あて先　〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
☎〇二五（五四三）九七一五
FAX〇二五（五四三）二〇二五
北越出版内「直江の津」編集部
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

第三巻一号（春号）
平成十五年
三月二十日　発行予定

内容などの問合せ先
北越出版
〒九四二－〇〇八二
上越市国府三－九－五
E-MAIL hokuetu@seagreen.ocn.ne.jp

季刊「直江の津」冬号
第二巻四号　通巻八号
発行日／平成十四年十二月二十日
発行所／直江津経済文化研究会
上越市中央二－一－八
直振興業内
☎〇二五（五四五）〇二〇二
発行者／なおえつ信金倶楽部
発行責任者／中川虎三
編集協力／（有）北越出版
責任者　佐藤和夫

■バックナンバー■

2001年3月　第1号　春号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
1福永家文書から幕末明治の直江津の町並みを復元する　浅倉有子
2掘ったら何が見えるか直江津
— 中世都市・越後府中・直江の津 —　小島幸雄
ミニ特集　春を呼ぶ祭り三昧
知の楽しみ　水族館に何を見るか　中村幸弘
フリースペース　石瘦庵主茶人宗次という人　平丸誠
見る目　神饌箱

2001年6月　2号　夏号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
3湊町から臨海工業都市へ
— 直江津の産業史 —　赤羽孝之
4人々のくらしに息づく「祇園祭」
—囃子の伝承を通しての一考察　近藤美保子
ミニ特集　村上の底力　町家の人形さま巡り
知の楽しみ　妙高山　現在・過去・未来　早津賢司
フリースペース　茶室見学ノート　石瘦庵　佐藤昭夫
講演　生活に潤いを　地元の文化を大切に　小林新治
見る目　シンボ凧

2001年6月　3号　秋号
年間特集　直江津を掘る
5フォッサ・マグナを境にした東西日本文化と南北の国土軸　市川健夫
ミニ特集　50年で変わった港
知の楽しみ　「緑の島」の物語るもの　大悟法滋
フリースペース　こんなまちがあった1　八木登美男
講演　「都市景観」から地域と歴史を考える　浅倉有子
見る目　織部柳図徳利

2001年12月　4号　冬号（品切れ）
年間特集　直江津を掘る
6古老が語った直江津の昔
ミニ特集　直江津路上観察
知の楽しみ　世界一の山脈 関田山脈　南木均
フリースペース　こんなまちがあった2　八木登美男
見る目　どぶね

2002年3月　5号　春号
特集　イントル、ナショナル、ヲイル、コムパニー　エドウィン・ダン
ミニ特集　同じまちなのに知らない“もの”ばかり？
知の楽しみ　能生白山神社　春の大祭と舞楽　土田孝雄
フリースペース　「とんちん館」感傷旅行　濱田研吾
見る目　木造大日如来坐像
わたしの直江津　「ゴチ……？」　米山康久

2002年6月　6号　夏号
特集　1　米山をめぐる民俗文化　渡邉三四一
2　報道のなかの祇園祭
ミニ特集　春日山で遊ぼう
知の楽しみ　雪国の固有と呼ばれる植物　長谷川康雄
フリースペース　山を楽しもう　永島賢司
講演　信頼回復なくして景気回復なし　割田満
見る目　小林古径邸の美しさ

2002年9月　7号　秋号
特集　1　直江津五智遊覧の旅
2　直江津の再生　江塚友之
ミニ特集　秋は寺町巡り
知の楽しみ　岩の原ワインの楽しみ　萩原健一
フリースペース　1　すみれが大好きだったダン道子先生　星野達雄
2　相馬御風と中山晋平になる上越の新民謡　村山和夫
講演　「地球」という館　渡邉　隆
見る目　越後の異才　東洋越陳人
わたしの直江津　銀河鉄道駅零時発　関由有子
読書びと　ユルスナールの靴　須賀敦子著

■「直江の津」が購入できる所　なおえつ茶屋（バックナンバー取り扱い）／柿村書店／エルマールブックセンター／春陽館／ラ・ソネ菓寮

季刊

直江の津



発行／平成十四年十二月二十日■発行者／なおえつ信金倶楽部■発行所／直江津経済文化研究会■制作協力／(有)北越出版■表紙構成／小谷充

頒布価格／三〇〇円(送料一八〇円)